ワレラユキト

凹凸

ワレラユキト

昭和十九年十月九日、夕食のあと私達は兵舎で髭を剃ったり四方山話に花を咲かせたりしていた。新竹（台湾）経由マニラ進出が十八日の予定で、明日は内地最後の上陸（外出）だった。

「全員飛行場に集合！」

十八時、指揮所から伝令が来た。集合すると搭乗員は本日の区分に従って出動準備を為し、翼下に待機せよとの戦隊長命令だ。

身支度を整えた者からそれぞれの乗機へバラバラと駆けた。負けまいと私も乗機までの五百米（メートル）余を

全力で走った。機上機関の佐藤軍曹に続いて九三二機に着くと、海軍魚雷調整隊により早くも魚雷が懸吊されようとしていた。私は機体内に飛び込み、持ち場の後上砲二十粍（ミリ）に規定の四百発を装填した。見れば隣の列線、海軍T攻撃隊の一式陸上攻撃機でも茶色の飛行服と白色の整備服が各機に群がり立ち働いていた。

機長達が本部に集められ、戻って状況説明をした。

本日早朝より沖縄以南の哨戒に出ていた海軍機からの通信が正午を最後に杜絶した。燃料の切れる十六時を過ぎても一切の消息が知れない。哨戒海域で敵機動部隊と遭遇し、電波を発する暇（いとま）もなく撃墜

されたと思われる。発見はしていないが敵は北上し、九州南部を襲う可能性が大きい。故に即離陸の態勢で翼下に仮眠して待てとの事だった。

「マニラまで行かずとも、敵の方から親切に来てくれた訳だ」「違うな、本当に親切なら明日の上陸の後で来るもんだぜ」「どっちだっていいよ、要するに青木町には遊びに行けないって事さ」

軽口を叩き合っている私達に地上勤務者が毛布を持ってきてくれた。早速腰の拳銃をずらして毛布に包(くる)まり、カボック（救命胴衣）を枕にして芝生に横になった。

前進基地をビルマのトングーに設け、カルカッタ、

チッタゴン、昆明への作戦に参加していた私達、陸軍飛行第九十八戦隊に内地帰還命が下ったのは一月だった。爾来海軍鹿屋基地にて洋上飛行、魚雷攻撃（雷撃）の訓練を受けてきた。七月には使用機種が九十七式重爆（キー二一）から四式重爆（キー六七）に改変された。

南方の作戦では加藤隼隊（第六十四戦隊）の一式戦闘機（キー四三＝隼）が私達の出撃に同行し、敵の戦闘機から護ってくれていた。それでも戦隊の空中勤務者の顔ぶれは、マレーに進出してからの二年と少しの間に過半が戦死して新しくなっていた。マニラに進出すれば、今度こそ生きて祖国に帰る事

は無いと私達は覚悟していた。
　マニラに進出して相手にする米軍のグラマンは、ビルマや印度で戦った英軍機のハリケーンやバッファローより、はるかに優速で頑丈だという。ハリケーンやバッファローとて弱い相手ではなかった。機体強度に優れ、巴戦に誘う一式を強引な機動と急降下で振り切り、低空を遠くまで逃げて高度を稼ぎ、送り狼宜しく帰途に就いた私達を頭上から襲った。武装も機銃が二挺の一式とは段違いに強力で、両翼十二挺から噴き出す火箭に味方は随分と喰われた。そして今度は敵の飛行場や港湾施設に対して高空から行う編隊爆撃ではなく、対空砲火の中心に単機降

下肉迫しての雷撃だ。マニラまで出掛ける手間が省けたと強がっても所詮空元気だ。軽口は自然途切れる。

南国鹿児島でも十月の夜は冷える。眠ろうとしても寒い。三式頭部を付けた九一式航空魚雷が黒々と夜目に冷たい。煙草を吸いたくなるが機には三千立の燃料が満タンだ。

眠れずにいると歌声が小さく聞えてきた。

あの隊長もあの戦友も
壮烈空に散ったのに
不覚や俺はまだ生きのびて
椰子の木陰ですすり泣く

戦友(とも)よ見てくれ、あの月を

少年飛行兵出身の大谷伍長の声だった。彼は本日の区分から外れていたのだが是非にと搭乗を中隊長にせがんだのだそうだ。

『九十八戦隊ノ皆サン、サヨウナラ。ワレ自爆ス』

いつごろ誰が歌詞を作って節(ふし)を付けたのかは知らないが、伍長の歌を聞いていると隊内波で別れを告げ、擦り寄ってきて翼を振り、降下していった戦友達の顔を思い出し、気分がセンチになって眼水が出てくる。

眠れないまま日が変わった。

十日四時、戦隊二十七機は夜設（夜間発着灯火設備）を頼りに離陸を開始した。鹿児島市上空で編隊を組み、鹿児島市北部～太刀洗間を往復した。七時、太刀洗陸軍飛行場に着陸、待機して情報を聞いた。

敵は昨日沖縄東方南大東島に艦砲射撃を加え、本日は早朝より沖縄諸島を空襲し、那覇市はかなりな被害で、現在も攻撃中だという。

私は攻撃隊長機の副操縦、仲元中尉の顔を見た。彼は沖縄の出身だった。日に焼けた童顔を強張らせ、歯を喰いしばって情報を聞いていた。同じく沖縄出身の当間軍曹も硬い表情だ。私自身沖縄の北隣り、奄美群島の沖永良部島の出身だけに尻に火が付く思

いだったが出撃の命令は無く、十月十日は避退、待機のみで終わった。

夕方、機長から状況説明が有った。海軍の偵察機は敵機動部隊二群を発見した。沖縄本島東方百浬（カイリ）（一浬＝一・六㎞）と南東百四十浬とにあり、それぞれ二ないし三隻の航空母艦を中心とした輪形陣で、戦艦・巡洋艦など数十隻が護っているとの事だ。

翌十一日も出撃命令は無く、終日待機して過ごした。

昨日来魚雷を吊るした陸軍機に驚き、飛行場の陸軍部隊の連中がつぎつぎと激励にやってきた。情報も刻々と入るようになったが戦果を挙げたというよ

うな朗報は一つも無い。その後敵艦載機はルソン島北部を攻撃、艦隊は南下した模様との事だ。

敵南下の情報にもとづき夕方近く鹿屋に戻る事となった。機長を先頭に途歩(みちあし)で乗機に向かうが大刀洗の航空廠に働く女子挺身隊の白鉢巻と日の丸の小旗を振っての見送りに照れた。何百人もの少女達の注目を浴び、色男(いろおとこ)になったような気がして無精髭が気になる。しかし嬉しい。前進基地からなどの出撃では少数の地上勤務者と竹槍を持った現地人の警備の雇員がパラパラと並んで手を振ってくれるだけだった。離陸後も敵のスパイが私達の出撃を通報して上げる狼煙が眼下のジャングルに先行して不気味だ

った。手を上げて女学生に応(こた)え、飛行機に乗った。鹿屋に戻ると兵舎には入らず九日と同じく翼下に待機して夜を明かした。

十二日、敵は早朝から台湾を攻撃してきた。出撃が命ぜられ、戦隊は十二時に離陸を開始した。編成は蝕接隊五機、攻撃隊二十二機の全二十七機だった。攻撃隊は全機雷装、うち第一隊長機（攻撃隊長搭乗）のみ電探（レーダー）を装備していた。電探は最新の兵器だが振動に弱く、離陸時に故障する事が多かった。訓練期間中にも電探手は深夜まで直すのに苦労していた。また洋上の艦船は電波の反射が微量で、五十粁(キロメートル)以内でなければ発見は困難だった。

桜島を眼下に編隊を組み、沖縄に向かって南下を開始する。私は第一隊第二編隊長機に後上砲手として搭乗、ペアー（班・組）は七名だ。南下開始と同時に各機の後上砲は試射を行った。

足（航続距離）の長い海軍T攻撃隊の一式陸攻は鹿屋から直接攻撃に向かい、九十八戦隊は沖縄北飛行場で給油し、そこから蝕接隊が先行し、後を追って攻撃隊が突っ込むというのが本日の段取りだ。十四時、沖永良部島の沖十粁を通過した。高度二千米、物を抛れば届きそうなくらい近くだ。黒潮の白く岸に砕ける故郷（ふるさと）を俯瞰し、通過していく飛行機の群れに私がいる事を父や母、兄や妹弟（きょうだい）達に知って欲し

いと思った。

沖縄上空に来ると那覇市は完全にやられていた。将に焼け野が原だ。那覇港には水面にマストを出して艦船が沈み、流出した油がぬったりとギラついていた。

十五時、北飛行場に着陸。飛行場も徹底的に痛めつけられ、滑走路には爆弾が空けた穴にドラム缶を入れて土で塞いだ修復跡が生々しい。駐機も給油も儘(まま)ならぬ状態であったが遣(や)り繰(く)りし、蝕接隊は十七時離陸、索敵に向かった。敵は沖縄の南南西、台湾東方七百粁にあるという。暮れていく空に五機は消えた。

飛行条件が厳しくなる日暮れから索敵し、夜間に攻撃を行う理由は、敵が高性能の電探や通信機器を装備しているからだった。攻撃に来る飛行機を敵は遠距離、―百五十粁から二百粁は手前にて捕捉し、邀撃機を優位に誘導して待ち伏せて叩く。敵の飛行機が自由に発着艦できる日中には、残念ではあるが真面(まとも)な接近や攻撃はとてもできない。海軍のT攻撃隊のTは台風（Tyhoon）と魚雷（Torpedo）の頭文字で、嵐に紛れての魚雷攻撃を意味しているのだそうだ。

攻撃隊の私達も燃料補給を完了、機側に待機する。伝令に呼ばれて私は機長と応急のピスト（指揮所）

へ行き、酒、サイダー、弁当を受け取った。基地の整備員と別れの盃を交わし、ペアーが車座になって弁当を使ったが食欲が湧かず、好きな酒も味を感じなかった。実戦は南方でも転科前の歩兵の時にも数え切れないくらい経験しているが雷撃は初体験だ。しかも夜間の戦闘だ。帰投時の洋上飛行の不安もある。他の者も同じとみえ、最後となるかもしれない食事なのに一向に箸が進まなかった。

日が沈んで寒くなってきた。蝕接隊からの敵艦隊発見の入電は無い。攻撃隊長（戦隊長）は機上で受信すると決め、十九時発進を命令した。

空襲を受けた飛行場は照明が十分でなく中隊ごと

に離陸に向かうが捗りが悪い。故障したのか動きださない機と滑走を中止する機が各一機あった。私の乗機も暗い誘導路で凹地に右の車輪を嵌め、あわや落伍かと焦った。

雷撃隊としての初出撃に誰もが逆上せていた。否、昂ぶっていた。機上機関の佐藤軍曹もすっかり昂ぶってエンジンのお清めを完璧に忘れていた。出撃に際しては別盃を交わす前に酒を流してエンジンを清めると決まっていた。準備線に来て気が付き、彼は慌てて天蓋の下の小窓から翼の基部に酒を流した。出だしから皆がこんな調子で果たして戦果を挙げる事ができるのだろうか。那覇湾上空で二十分以上も

時間をかけて編隊を組み、南南西百九十度に向かった。

攻撃の企図秘匿の為、無線は離陸前より電波管制を敷いていた。発信は攻撃隊長が突撃を命ずる時と自爆機が訣別を告げる時だけだ。攻撃隊長機は二つの送信周波数を持っていた。一つは基地の対空通信所用、一つは隊内用だ。列機の送信波は隊内用一波だけで、蝕接隊が対空通信所宛送信を行うと通信所は折り返し攻撃隊長宛転電し、列機はそれを傍受した。

『ワレ敵機動部隊ヲ発見、蝕接中』

南下開始三十分にして通信所が送信してきた。同

時に通信所は蝕接隊の電波の方位を測って私達に伝えた。針路を修正し、翼灯尾灯を消し、南下を続けた。

離陸して二時間三十分、沖縄南方七百粁に達した。既に戦域に入っている筈だが夜の海上は見通しが利かない。雲高は五百米、索敵は困難だった。編隊飛行に僚機との接触の危険を感じ、単機ごとの索敵に移った。高度を三百にし、搭乗の七人が舐めるように海面を見張るが波頭さえ見えない。

対空通信所からは、その後なにも打ってこない。周波数の異なる蝕接隊の様子は攻撃隊長機にしか分からない。やがて攻撃隊長機から攻撃中止、帰投を

隊内波で命じてきた。

私達の機長、平田大尉は僚機との接触を恐れ、消していた翼灯尾灯を点灯した。戦場上空では極めて危険な行為だが大尉は悠々としていた。すんなり引き揚げるのも残念で五十米まで降下、半径二〜三粁の円を描いて索敵を続けた。水平線を透かし、異影を求めて目を凝らすが何も見えない。燃料の残を考慮して索敵を一時間で断念、雲上に出て針路を西に取り、高雄に向かった。

台湾南端と推測される位置で北進、高雄到着と思って雲の下に降りてみれば澎湖島だった。若干回り道して十三日未明二時、高雄に不時着。駐機させる

と機を飛び降り、自動車のエンジン音を頼りに燃料補給車を探した。発見はできなかったが敵の機動部隊が近海を遊弋している、地上で艦載機の攻撃を受けるのは勘弁だ。ビルマの前進基地で散々に懲りている。鈍(ノロ)くさいブレンハイム（英軍の双発機）にさえ、地上に在っては手も足も出なかった。初めて降りた飛行場を方々駆け回り、へとへとになって海軍の補給車を捉まえたが雷装の陸軍機を怪しんで埒が明かない、拝み倒して八百立(リットル)だけ分けてもらった。

補給が終わってほっとすると無性に喉が渇いた。水道栓の在り場所が分からない。滑走路の脇の溝で水が光っていた。四つ這って啜った。蒼っぽい味が

した。私を見て副操縦が真似た。
ペアーが集まり一服つけた。時計を見れば四時に近い。朝一番で空襲を受けては元も子も無くなる、一刻も早く離陸しようと決まった。
まだ暗い。誘導灯は消えていたが強引に滑走路に出て離陸、台中の上空にあと少しに来て夜が明けた。私は後上砲砲塔に上がった。見れば海峡の彼方に支那大陸が平たい雲のようだ。目を高雄の方角に移すと黒い点が幾つも飛び回っていた。敵の艦載機だ。味方の高角砲弾の炸裂光も見える。操縦席に行き、肩を叩いて平田大尉に大声で伝えた。
「早く離陸して正解だったなあ！」

大尉は怒鳴り返して笑った。

台湾北端を過ぎて洋上に出た。雲が多くなり高度四千で雲上に出る。後方を警戒して台湾の山脈を眺めていると雲を分け、キー六七が一機現われて追いかけてきた。近付くキー六七の番号を読み取ると教育隊で同期の穴井曹長が乗る松本准尉機だった。松本機は主翼が触りそうなくらいに近寄り、バンク（翼を左右に振る）して並んだ。伊式重爆（伊国製の輸入機）による西安飛行場爆撃や重慶攻撃にも参加している老練な准尉だが暗夜の洋上から無事帰還でき、雲を出ると味方がいて余程嬉しかったに違いない、二番機の位置にきっちりと付いた。

雁行の影を雲に映して一路北上、北飛行場にて給油、十四時鹿屋帰着。平田大尉が戦隊長に帰投の報告に行き、作戦の顚末を知った。

蝕接隊は十九時三十分敵機動部隊を発見、輪形陣の外周と思しき上空を旋回して攻撃隊の到着を待った。到着に合わせて敵直上に進出し、照明弾を投下する為だが近付き過ぎてしまったのか対空砲火を浴びた。電探射撃ゆえ敵砲火は暗夜でも正確だ。敵は電探装備の夜間戦闘機も飛ばせたようで、安野曹長機のみ帰投した。暗夜の洋上に機位を失い、攻撃隊にも未帰還機が四機でていた。鹿屋から直接攻撃に向かったT攻撃隊は敵艦隊を捕捉、空母四隻を撃沈

したという。海軍に後れを取ったと戦隊長は悔しがり、明十四日は全力で敵を屠(ほふ)れと集合をかけて命令した。九日の夕方から不眠不休に近かった。久し振りに入浴、髭も剃って十三日の夜はぐっすりと眠った。

チッタゴン爆撃を最後としてビルマの前進基地を引き揚げ、私達は一月、マレーのスンゲイパタニに集結していた。十七日、内地帰還命令が突然に下り、隊内に歓声が上がった。

生きて祖国に帰る事は無いと皆が思っていた。戦隊長が機上で戦死していた。後任は離陸時の事故で

重傷を負い、後送された。仏印からマレー、スマトラ、昆明、印度に作戦し、機上で、自爆で、敵の空襲で、或いは事故で、約百八十名の隊員を失っていた。夜間特別攻撃や哨戒に出た印度洋から戻らぬままの機もあった。隼戦闘隊の加藤中佐でさえ未帰還だ。

手放しで内地帰還を喜んでいられない思いは有る。前線に留まる他部隊への手前も有れば苦戦を重ねている印緬方面の航空戦力を他へ転用せねばならぬ祖国の戦力の逼迫を思うと尚更だ。しかし腹の底から込み上げてくる嬉しさを抑える事は無理だった。妻子のある人達は特にニコニコで、作業をしていても

話しかけてきて煩い。私は独り者だし気楽な次男坊だが奄美群島の出身なので帰還飛行の途次、おそらく故郷を望見できるであろうという他の人達には無い喜びが有った。

『九十八戦隊ノ皆サン、長イアイダ御苦労サマデシタ。内地ニオ帰リニナルソウデ、心カラオ慶ビ申シ上ゲマス。東支那海デ、マタオ会イ致シマセウ』

毎度の事だがニューデリーの敵のラジオ放送には肝を抜かれた。

『イングリ（英国）ムカンプ（嫌いだ）、私タチ日本ノ味方』と言い、ビルマでもマレーでも現地の人達は非常に友好的だったが絶対に気を許すなと命

じられていた。言われなくても野戦部隊の兵隊だ、全員が心得ていた。それなのに情報がいつも殆んど筒抜けなのは不思議だ。折角の嬉しさに水を差される思いがした。

地上部隊と違い飛行隊、それも重爆隊の移動は簡単だ。爆弾の代わりに搭乗員各々の荷物を爆弾倉に抛り込んで飛び立つだけだ。ゴムの木に囲まれたハウスの、のんびりとした彼女達とゆっくり別れを惜しむ暇も無く一月二十九日、戦隊は仏印サイゴンの空に向かった。サイゴンから海口（海南島）、台湾、那覇を経、僅か四日で鹿児島県鹿屋の海軍飛行場に着陸した。

以後私達は海軍第二航空艦隊の指揮下に置かれ、雷撃訓練を受ける事となった。戦隊の通称部隊名は颯（はやて）部隊となり、隊編成も生活様式も海軍式に改められ、号令から日常用語まで新しくなり、小学生の体験入隊か新兵に返ったような生活が始まった。地上勤務者は海路にての移動で、到着合流は三月になった。怪我やマラリヤで入院していた人達は五月になって合流したが、追及で乗り合わせた船団がサンジャック湾でB－二五に攻撃され、酷い目に遭ったそうだ。

鹿屋に着いてすぐ戦隊長が替わった。隊員でも外地勤務の長い人達は浜松飛行学校や各地の教育隊へ

教官要員として転勤していった。私も転勤を期待したが飛行学校の助教時代に上官と喧嘩して前線送りとなった経歴が災いしたようで、残念ながら残留組だった。

梅が咲き寒桜も綻(ほころ)び始めて春も間近だが日陰には昼間でも霜柱の残る二月だ、南方の現地の人達と同じ色に焼けた肌に内地の冬の寒さは堪(こた)えた。私は戦技（射撃、爆撃、通信、写真術修得者）下士官として戦闘に参加していたが地上に在っては中隊の被服係を命じられていた。台湾の嘉義で冬服の準備は一応したが充分でなく、皆ぶるぶると震えた。それでも久し振りの内地の風物が嬉しく、誰からも苦情

は言われずに済んだ。

転出者の補充が済むと射手や通信員から選抜された者が専門の偵察員として洋上航法を教育された。通信員は電信員と呼称が変わり、海軍式の仮名符号暗号を学習した。電信の教官の海軍少佐は明治帝皇女が降嫁された伯爵家の令息であると聞いた。畏れ多くも今上陛下の従兄弟様からの教育なのに居眠りをして、私はしばしば注意された。操縦、偵察、電信、整備と別れて訓練を受け、時には海軍から配属された偵察員と搭乗して洋上航法、海軍式の地点標定の実際の手ほどきを受けた。

総員手を洗え、甲板掃除、巡検用意などの号令や

オスタップ（たらい）、チンケース（バケツ）、艦隊入港（爪楊枝）などの海軍用語にはすぐに慣れたが、機上で「ヨ〜ソロー（宜候）」と海軍さんが怒鳴ると我々陸式は気合いが抜け、ニヤニヤクスクスしてしまう。クスクスの原因が分からず海軍の偵察員が変な顔をするのが更に可笑しくて笑えた。

別府湾に浮かぶ小型空母鳳翔と駆逐艦一隻を相手の擬襲（攻撃動作演習）も朝から晩まで連日のように実施された。超低空、―十六米以下まで降下しての魚雷発射訓練だ。初めのうち訓練には九十七式重爆を使った。深い角度の降下には適さない機体だがそれでも突っ込み速度は時速五百粁、秒速にすれば

百四十米、引き起こしがコンマ一秒遅れても海面にぶつかる。機の幅は二十二米、トリム（釣合・復原力）が少し乱れても翼が水を切って墜落だ。私は左手でロープにぶら下がる力が相対的に弱く、操縦員には不適とされた。以来ずううっと悔しい思いをして来たが波間に油膜を残して消えた僚機を見て、水戸飛行学校時代からの不満は霧散した。

空母はさほどでもないが駆逐艦はスピードは出せるし回避運動が巧く、海軍の偵察員から合格点を貰える位置に飛行機を持って行くのはかなり難儀だ。ちなみに駆逐艦は全速でなくても三十節（ノット）（一節＝一・八五㎞）以上訳もなく出せ、航空魚雷は性能諸

元の数字でも四十節少々がギリギリだ。夜間洋上飛行訓練もすぐに始まった。数多(あまた)の輝く伝統を受け継ぐ戦隊だ、訓練進度は速かった。

海軍式の生活で面白く思ったのは月々火水木金々の歌と違って無闇と上陸の多い事だった。陸軍で外出は概(おおむ)ね週に一度だけと決まっていた。海軍では隊内にバス（風呂）が有るのに入湯上陸と称する泊まりの外出が有ったり半舷上陸という半数ずつの上陸が頻繁に有り、訓練は厳しくても気分的には毎日が休日前日のような感じだった。経験はしていないがゴキブリやネズミを捕まえると御褒美に上陸を貰えるらしいという情報も有った。基地の北にある高

隈山に雲が夕方かかると翌日は必ず雨が降り、上陸になる確率が大であった。何かの都合で夜間訓練が急に取りやめになっても即上陸だ。夜景の市中への外出など、六年間陸軍の兵隊をやってきて見るのも聞くのも初めての事だった。更に兵でも初年兵以外は外泊も許されるのだから豪勢だ。初めから海軍に入っていれば好かったと思った。早速私達は海軍さんに頼み、鹿児島市内に下宿を紹介してもらった。

五月、松本准尉ほか四名で洋上航法訓練に出た。佐多岬より真西に向かい南西列島の北から沖縄水域まで飛ぶコースだった。本土近海に出没する敵潜水艦への攻撃を兼ね、爆弾倉には五十瓩（キログラム）爆弾を四

発装備していた。その頃敵潜による船舶の被害が増大していた。そのため敵潜を発見した機には一日、撃沈した機には一週間の上陸を与えると通達された矢先だった。

発進して二時間半、トップ（機の先端・銃座が有る）で海面の波頭を捉え、偏流測定をしていた私は左下に見慣れない物を認めた。鯨かと思ったが少し大きいような気がした。思う暇もなくそれは飛沫を曳いて潜りだした。潜水艦だ！　彼我識別（ひがしきべつ）の白線が無い。初体験で私は慌てた。操縦席の松本准尉を振り仰ぎ、

「センカン、センカン」指を差して叫んだ。慌て

た私はセンスイカンと口が回らなかった。
　准尉は海面を覗いて頷くと左に旋回し、敵潜の航跡に航法目標弾を投下した。手順に淀みが無く訓練どおりで頼母しい、爆弾が当たりそうな気がした。海面に白く開いた標(しるし)を基点に敵の針路を測り取り、爆弾倉を開いて投下装置に通電する。四発の爆弾ごとに赤いランプが点灯する。私はトップに腹這い、四ヶ月前までの戦闘を思い出す。相手は潜っていく潜水艦だ。対空砲火も無ければ頭の上からハリケーンやバッファローのかかってくる心配は零だ。怖い物無しの一方的な戦闘だ。それと一週間の上陸という御褒美だ。

機を一と旋回させて白い目標から進入して航跡を辿ると、―いた。敵は必死で潜り続けている。機帆船から病院船まで手当たり次第に沈めている凶悪な人殺しだが、今は潜るしか手の無い敵が一瞬だけ可哀相な気がした。

投下装置の赤ランプを確認、准尉が電鍵を押した。黒い爆弾が二発、小さく〳〵なって落ちて行き、ポカン〳〵と水柱が二本、真っ白く立つ。戦果を期待して上空を旋回するが不明だ。針路を立て直し、残り二発で攻撃を加えた。

海面下二、三十米までは上空から分かる。それより深く潜られると見る事は出来ない。海面を見張っ

て旋回を続けること三分、ポッカリと少量の油が浮き上がってきた。もっと浮いてこないかと搭乗の五人が風防に額を押し付けて目を皿にする。それっきりだ、油も気泡もそれっきり浮き上がってこない。若干の損害は与えたようだが一週間の上陸は無理だ。もう一分、せめてもう十秒早く発見していれば火を噴かせてやれたと思うと悔しい。松本准尉を見上げると、

「処置なし、処置なし」と言ってにが笑い、「だいたいお前がもっと早く見つけておりゃ、こんな事にはならなかったんだぞ。ウー（女性）の夢でも見て涎（よだれ）を垂らしていたのと違うか」と叱られ、拳固を

一発頂戴した。

その前後、同じ沖永良部島出身の徳永曹長の父親(ぁちゃ)が私の父と鹿児島に出てきた。父に会うのは昭和十三年に軍隊に入ってから初めてだ。私は徳永と連れ立ち、湾を渡って鹿児島へ外出した。下宿に父と泊まったが六年振りで会っても男同士では十分と保(も)たずに話の種は尽きる。写真屋を呼び、記念写真を撮った。私は軍隊に入って酒の味を覚えた。私の呑みっぷりを父は呆れ返って眺めていた。翌朝桟橋に行くと徳永も親子で来ていた。父親二人を残して渡船は桟橋を離れた。徳永はハンカチを振って別れを惜しんでいたが私は聳(そび)える桜島を見、父の方を向かな

いようにした。鹿屋での訓練が終われば戦隊はサイパンに行くと決まっていた。父にしても無事で和泊に着けるかどうかは分からない、生きて見る最後だろうが照れ臭かった。

六月、愛知県の三菱工場でキー六七が量産され、海軍半田飛行場へ飛んだ。新機教育で福生に出向していた整備班と連絡を取りながら半田でキー六七を逐次受領し、試験飛行や兵器の装備で忙しい毎日が続いた。

キー六七（四式重爆＝飛龍）は、それまでの乗機、九十七式重爆に較べて性能が格段に向上していた。最大速度は五百三十七粁で一式戦闘機より二十二粁

も速く、突っ込みでのスピードは六百三十粁まで平気だった。武装も大幅に強化されていたし、戦訓から燃料タンクには消火装置が備えられていた。航続力は燃料三千立（リットル）を積み、巡航速力三百五十粁で約八時間、作戦行動半径は八百粁だった。陸軍の飛行機は国境を接すソ連邦を敵と想定して設計されている、長距離洋上作戦用の海軍機に較べれば足は短い。一式陸攻の約半分だがスピードは百粁も速く出せた。操縦性能も抜群で、垂直旋回も可能だと教えられた。

戦隊保有定数は四十五機だった。六機、九機と纏（まと）まると鹿屋に戻った。三機で小隊、三小隊で中隊、三中隊二十七機で戦隊だ。機番号は一中隊が七百、

二中隊が八百、三中隊が九百番台と決められ、私は三中隊第三小隊二番機で、九三二機が乗機だった。七月上旬に全機機種改変完了、整備班も全員鹿屋に戻ってきた。

機種改変後の訓練は殆んど夜間攻撃一本に絞られた。その攻撃法は策敵機の敵艦船群発見の情報で蝕接隊が発進、やや間を置いて攻撃隊が出発、蝕接隊からの電信に誘導されて攻撃隊は目標を捕捉、単縦陣となり敵艦船群の外周をまわる。その態勢が整うと蝕接隊は敵直上に進出、照明弾を連続的に投下して敵艦船を照明する。一列になっていた攻撃隊は各個目標を定めて雷撃、終了すると単機基地に戻ると

いう手順であった。
夕飯時から離陸を始める夜間攻撃訓練は深夜に及び、支那ソバのチャルメラみたいだとマレーから鹿屋に着いた日の夜大笑いした巡検ラッパのスピーカーの放送を聞く事も少なくなった。夜間訓練は雨天でも上陸無しで連日実施され、寝返りも儘ならぬ吊り床では熟睡ができず疲れが残って身体がきつく、誰からともなく吊り床の中の小さな藁布団をデッキ（甲板・居室）の床に直に敷いて寝るようになった。訓練の激しさに被服の破れなども目立ち始めたが海軍の基地で陸軍の被服の補充は容易ではない、中隊の被服係である私は已む無く鹿屋の被服庫と交渉し、

海軍の飛行服、飛行帽、飛行靴を借用し、傷みのひどい者から支給した。

海軍の真新しい飛行服に陸軍のくたびれた飛行帽と飛行靴、陸と海がまぜこぜで両棲類のようだと燥(はしゃ)ぐうちにも戦局は悪化していた。連合艦隊長官の殉職、ビアク島の陥落、私達が派遣される予定だったサイパンも七月に奪(と)られた。伝聞では陛下が大臣だか総長を、お叱りになったという。サイパンに続いてグァムが奪られる少し前、ニューギニアから同じ陸軍の重爆隊、飛行第七戦隊が鹿屋に移動してきた。仲間が二倍になって心強い。海軍式の生活に戸惑う彼等に、ふと気が付けば偉そうに先輩風を吹

かしていた。

九月、演習用魚雷を実射、最後の仕上げがそれで終わった。訓練期間中、二十名近くの隊員を事故で失った。戦隊は中隊ごとの編成に直り、新しい兵舎に移動した。海軍式の訓練で中隊はバラバラになっていた。転属で来た新しい隊員もいる。中隊の団結を図る親睦会が催され、新竹経由マニラ進出が伝えられた。

十月十四日は出発準備に加えて病人が出たりで早朝から忙しかった。十二日の作戦で蝕接隊は潰滅している、本日は全機雷装での出撃だった。全力二十

七機とする為、十二日の作戦で失った八機、五十六名の補充には加療で入室中の者や普段は事務に携わっていた年配の空中勤務者からも志願を募って充てられた。第七戦隊は訓練を開始して間が無く出撃はしない。

その後の情報で敵はミッチャー少将率いる五十八機動部隊と判明。主力は空母十六隻らしく戦艦数隻を含む約百六十隻の大部隊との事だ。T攻撃隊が空母四隻を十二日に沈めているがまだ十二隻も残っている、魚雷を一本しか吊れぬのがもどかしい。

出撃する隊員に鹿児島県下の女学生から寄贈された日の丸の鉢巻が配られた。勝利の期待を血文字で

認(したた)めた鉢巻が幾本か混じっていた。戦隊のピスト前には攻撃隊長機が駐機してい、

『一発必中敵撃滅／陸軍特別攻撃隊』と墨書(ぼくしょ)した幟(のぼり)が傍(かたわ)らに翻(ひるがえ)っていた。

装備の優劣と兵力の多寡で勝ち負けの決まるのが今日(こんにち)の戦争なのに、元亀天正の出陣のようだと思いつつ気は昂ぶった。本日の指揮官（攻撃隊長）が戦隊長ではなく何故か戦隊付きの宮嶋少佐に変わっていた。上級の判断とは理解できても全力で敵を屠れと昨晩命令した戦隊長が鹿屋に残るのは、何となく割り切れない思いがした。宮嶋少佐の乗機機長富永大尉が、御自分の第一隊の搭乗員一人一人を激励し

て歩いていた。顔に平素の柔和さが無く、鬼の面(めん)のように見えた。

九時半ごろ鉢巻姿の搭乗員がカボックをきっちりと締め上げてピスト前に整列、戦隊長の訓示を受けた。十二日の失敗を顧慮し、本日は出発時間が早められ、十時鹿屋発進だった。攻撃も夜間ではなく薄暮とされた。訓示が済むと恩賜の清酒が各機に一本ずつ配られた。

本日は中継基地の沖縄北飛行場から海軍の天山艦上攻撃機隊が一緒だというしT攻撃隊も鹿屋から長駆同時に攻撃するという。十二日の作戦でも索敵蝕接は本家の海軍に頼み、九十八戦隊は全機雷装にす

れば徒に八機を失う事は無かったかもしれない。日をかけて洋上索敵員を養成する海軍に較べ、実質半年に満たない訓練で索敵から雷撃まで独力で行うという陸軍の構想には無理が有るのだ。

富永大尉機が滑走を始めた。私の乗機、九三二機もプロペラを緩転させて離陸順を待つ。その準備線に石油缶を抱いた関上等兵が山下上等兵と息を切らせて駆けてきた。私は砲塔を降り、扉を開けて缶を受け取った。真っ黒に燻(いぶ)された缶の中身は蒸しあがったばかりの唐芋（薩摩芋）だった。

私は芋で育ったようなものだ。私に限らず沖永良部島の者が米を喰えるのは正月と葬式くらいで学校

の弁当も芋だった。中学校にも行けず、芋を喰って砂糖キビを作る百姓が嫌で私は十八で軍隊に入った。父や兄が、お前のような鼻っ柱の強いチビは朝昼晩、十時に三時、夜中でも殴られるぞと言って止めたが二十(はたち)になれば徴役は必ず来るのだし、ちょっとくらい殴られても三度の米の飯は夢だった。それなのに朝食の時、何故か芋のことを思った。

「もう十月も半ばだから新芋の穫れる時季だな、食べてみたいな」

誰にとなく言っていた。

「曹長殿、自分が農家に頼んで分けてもらってきます」

そう言うと向かい合って飯を喰っていた関上等兵が兵舎を飛び出していった。彼は本日の搭乗から外れて悔しがっていた。

乗機が滑走に移った。十三粍機銃を横に動かし、お礼の気持ちを込めて私が側方窓から右手を振ると二人は万歳の恰好で応えた。飛行帽を脱いで御辞儀をすると、キッチリと踵(かかと)を合わせて挙手の礼を返した。

全機離陸、鹿児島湾上空で編隊を組み沖縄に向かう。九三二機の本日のペアーは陸軍五名、海軍二名の混成だ。前回参加した副操縦の大石軍曹は高熱を発して倒れ、代わりに海軍予科練出身の江田飛行兵

長が搭乗していた。偵察は海軍の味沢兵曹長で、前回と同じだ。

鹿児島湾口を出ると種子島が見え、十月の陽に騒ぐ波の彼方に奄美群島が現れ、沖永良部島がぐんぐん近寄ってくる。挙手をして故郷に別れ、私は石油缶を抱いて平田機長から順に回り、経緯(いきさつ)を話した。まだ湯気の昇る蒸し芋に皆驚きはするが私ほどには好きでないらしく、欲しいだけ取るよう勧めても一つくらいしか取らない。肩透かしを喰ったような気分だが新芋は旨い、腹いっぱいに食べた。

十三時北飛行場着陸、直ちに燃料補給にかかる。本日は皆落ち着いていて手抜かりは無い。私は佐藤

軍曹と翼に上がって御下賜の酒をエンジンに流し、魚雷にもかけて清めた。残りは等分に注ぎ分けてペアーで頂いた。十六時離陸、高度千五百で南南西二百十度に機首を向けた。海軍索敵機の電によれば敵は台湾東方七百五十粁の洋上にある。

轟(とどろ)くエンジン音を聞き、傾いていく太陽を見るだけの単調な飛行だ。低気圧が発達しているようで南下につれて海の様相が変わりだし、黒々としたうねりに白波が目立つ。南下開始から二時間、燃料の限界なのか私達の後方五千米、高度千米に随いていた天山艦攻十二機がバンクして去った。水平線に触れかけた太陽から伸びる光の帯が眩しい。

天山隊の反転からほどなく、第二隊の外側機が半分海に沈んだ太陽の上方を射撃した。見れば小型機がただ一機、果敢にも逆光の空から突っかけて来ていた。グラマンのようだ。ずんぐりとして遠目にも醜(みにく)い。気を引き締めて他に敵はいないかと八方を見回すが一機だけだ。

重爆の編隊に一機でかかって来るとは無茶をする敵だ。勇敢なのか馬鹿なのか、それとも私達を舐めているのか、・・・見ていると敵の両翼から火が噴き出し、第一隊の外側機に第一撃をかけた。印度やビルマでの英軍機と同じで遠い距離からの射撃だ、千米は離れている。私は敵の前上方を狙い、二十粍

砲の引金を引いた。同時に戦隊二十七機の応接可能な後上砲、尾部砲、側方機銃が一斉に火を吐く。五十を超える火箭の集中を受け、二回横転したと見る間も無く黄色っぽい火を噴いてグラマンは一度仰(の)け反(ぞ)り、失速反転の恰好で落ちていった。

足の短い艦載機がいたという事は敵の艦隊も近くな筈だ。対空砲火に備えて散開すべき状況なのに二、三番機が左右から九三二機の下に潜り込んできた。二機の機長は共に少尉だが実戦経験は無い、グラマンの出現に肝を縮めたのだ。九三二機はせり上げられ、一時的に高度を百五十米ほど増す。その途端、閃光が奔った。敵だ！　高角砲弾の炸裂だ。求める

敵艦隊に回合したのだ。左前方およそ八千米、重火器の吐く炎の塊(かたまり)が夕闇の訪れた海面に散らばっていた。

戦隊は急速に散開、『ト』の連送で攻撃隊長機から全単突撃を下命してくる。攻撃隊長機は小さくバンクして残照の空から黒い海に先頭で突っ込んで行く。時計を見た。十八時四十分、スピードが増す。弾煙が重なり、空が汚れる。目の前が閃光を感じると同時に真っ黒く染まる。その弾煙の向こうに、大きな陸のように敵の艦隊が展開しいる。一群だけでなく輸送船団を連れているのか、すさまじい数だ。

攻撃隊長機を追う戦隊の前面に数十の水の柱が立

ち昇ってきた。敵は主砲の弾丸を海に撃ち込み、巨大な水柱を林立させて私達を衝突させようと企(たくら)んでいるのだ。巨大な水柱のさまは、日本海海戦の絵に似ていた。

右に左に機を横滑りさせ、突進を続ける。砲弾炸裂のあおりも加わって機は揺れに揺れ、細流の渦に躍る笹舟のようだ。今しがた二、三機にせり上げられている。九三二機は列機より高度が少し高い。機の腹にガッと強い炸裂を受けた。全速で突進する機が跳ね飛ばされて裏返るような衝撃に、

「やられた！　」と叫びかけるが大丈夫だった。

目の端に炎を感じ、見れば左下方を行く第三隊の内

側機が火を曳いていた。搭乗者は誰か！　思い付く間も無い。炎が機体を包(くる)み、頭の影が四人、操縦席の風防に瞬時映った。

駆逐艦の列を過ぎた。本日の攻撃隊長宮嶋少佐から外側の護衛艦はかまわずに飛び越え、輪形陣の中央の空母を攻撃するよう北飛行場で念を押されている。魚雷をぶち込んで空母を真っ二つに割ってくれる迄はやられる訳にはいかない。

火の玉と火の槍が、逆さになったスコールで噴き上がってくる。黒い斑点が前後左右上下を埋め尽くす。斑点の中には砕けた砲弾の鉄が充満している。機は毎秒百五十米の全速で突進している。敵弾の炸

裂で、千八百五十馬力×二基のエンジン音が聞こえない。

戦艦か、大形艦が前方に二隻いた。噂に聞いたポンポン砲が、艦橋の根元から消防ホースで水を撒くような赤い流れで右から左に空を撫でてきた。右の隊の長機、吉川大尉機が赤い流れに包まれて火を噴いた。続いて三番機が火を曳いた。火の塊の腹に、魚雷がくっきりと黒い。炎の編隊を組み、二機は真っ直ぐに進む。

「トクナガー　」

私は叫んだ。吉川機には同郷の徳永が搭乗していた。火の粉が一つ、敵の艦橋に散った。

左前下方、第三隊長機瀬戸大尉機が敵弾を貰ったか、避弾運動を誤ったか、機腹で海面をバウンドした。二度までは算えた。

喉が渇く。空腹も覚える。夕食はまだ済ませてはいない。いや、食べたような気もする。—どっちだっていい、腹が減っては軍(いくさ)は出来ぬと昔から言うし敵弾を貰えばそれまでだ。胴体タンクの脇から弁当を取り、手摑みで口に入れた。あっと言う間に喰い終え、もう一つ食べたくて手に取ると佐藤軍曹が見ていた。恰好が付かなくて喰えと勧めた。首を振り、変な目で見られた。

更に一段、艦列を越えた。はぐれたのかやられた

のか二、三番機は随いて来ていない。偵察席の味沢兵曹長が右だ左だと怒鳴り、平田大尉が避弾していく。

「空母発見！」

横滑りと波状運動を繰り返し、機首を突っ込んだ先に馬鹿でっかい船が平ったく居た。海を溢れさす巨大な俎板(まないた)だ。雷撃訓練の相手をしてくれた鳳翔を艀(はしけ)のように感じる。飛行甲板のこちら側が、対空火器の発射光でちょっとした仕掛け花火だ。海面すれすれに高度を下げ、雷撃姿勢で秒速九十米に減速する。

「・・・、ヨ～ソロー」

味沢兵曹長が機を定針させた。

空母が急速に迫り、火の玉の列が機の尾部を掠(かす)める。敵は本当にでかい。鳳翔は十五機しか積めないが此(こ)の敵は百に近い飛行機と二千を超える人員を乗せているのだ。魚雷の一発や二発くらい屁でも無いようにでかい。

「発射用意！　」

味沢兵曹長が怒鳴った。敵弾が二、三発、機を貫いて抜けた。昂ぶる。あと二、三秒で発射だ。ガンバレ〳〵、大声で叫んだ。

「撃て！　」の声で機速が増し、機体が二十米ほど浮く。―その筈が、同じスピードのままだ！　若

しかして魚雷が落ちていない？

空母の舷側が目の前に迫る。横っ広く高い高い塀だ。平田大尉が反り返り、操縦桿を目一杯に引いている。一〇七〇瓩の魚雷を吊り下げ、舵の効きは鈍い。目を閉じて秒を算えた。ぎりぎりで躱した。

砲塔を降り、私は右の側方窓から海を覗いた。空母は超えても輪形陣は大きい。対空射撃は突入時より猛烈だ。敵艦船群の上部構造物が、パレンバンで見た油井の櫓のように海に無数だ。地獄の針の海だ。

後下方右で火柱が上がった。更に一本、高い火柱だ。敵の何に命中したのか判別できないが九三二機

の戦果ではない。私達が雷撃のコースに入った時、空母の上を行く味方を二機、閃光の中に視認している。その二機の戦果だ。私達の魚雷は、しっかりと懸吊されたままだ。

慕い寄る火の玉の群れを横滑りと波状運動でやり過ごし、エンジン全開で突入と反対の側に逃げた。突撃の開始から長い時間が経過したように思えたが離脱に成功し、ほっとして時計を見れば未だ十九時になっていない。

私は佐藤軍曹と魚雷の投下系統を調べた。異常は発見できなかった。炸裂した砲弾の破片が当たり、懸吊部のカシメがきつくなったのかもしれない。報

告すると平田大尉は機を上昇させ、急降下して引き起こし、魚雷にG（重力・加速）を掛けた。音をたてて翼が撓(しな)るくらいの強いGだが魚雷はしっかりとくっ付いて離れない。右に左にのたうってみても同じだ。

「魚雷様に惚れられちゃっても俺は困るんだ」

平田大尉は冗談を言った。大尉は妻帯者だった。子供さんもお生まれになったとスンゲイパタニで聞かされていた。

魚雷を離すのを諦め、大尉は敵艦船群の外周を大きく回り始めた。戦況報告の為にだが輪形陣を抜け出し、一度ほっとしている。T攻撃隊も戦場に到着

したのか敵はまだ猛烈に撃ちまくっている。噴き上がる火の雨を見ると、擽(くすぐ)られるのとは異なるが股の付け根が似たような気分だ。

油が燃えているのか海に火が流れていた。目を凝らせば黒い艦影がある。空母ではない。高度を上げて北上、帰途に就いた。

気が付くと機体の中を強風が通り抜けていた。至(いた)る処(ところ)に孔(あな)が明(あ)き、左の側方窓の風防は綺麗に飛んで枠までが無い。幸いに負傷者は無く、全員が元気だ。

電信員の西山伍長が送受信機を点検した。対空通信所に帰投の方位を測って貰おうと思ったが敵弾が

貫通し、送信も受信も完全に壊れて手の施しようが無い。味沢兵曹長の航法技量を頼りに高度五百で直近の宮古島を目指した。

思えばグラマンの襲撃のあと二、三番機にせり上げられ、九三二機は高度を少し上げた。その状態で散開に移ったので最初の弾幕に対し、その上を飛ぶ結果となった。私達より高度の低い列機は真面(まとも)に弾幕に突っ込み、被弾して火を噴きながら突撃する事となった。かなりの機が最初の斉射でやられていた。はぐれたのではなく二、三番機も最初でやられているのだ。

三十分ほど飛び、高度を二千に上げるとサーチラ

イトが三本、左の闇から伸びてきた。こんな処にも敵はいたのだ。何時の間にか上空は一面の雲だ。振り回す長大な光の棒に照らされた雲の底が不気味だ。しかし敵は四千米は離れているし、去っていく単機に夜間の発着艦の危険を犯して夜間戦闘機での応接も有るまい。

神仏に縋(すが)る心地のうちに十五、六分が過ぎ、月明でも撃たれるまで接近に気が付かないと聞く夜間戦闘機に襲われる恐怖が薄れるのと入れ替わりに天候が崩れた。風防が雨で濡れ、雲中飛行となった。孔という孔から吹き込む雨が手袋にも飛行服にも染み透り、ペアーの全員がガチガチと震えた。エンジン

は快調だが配線の被覆に損傷を受けているに違いない電気のドロップが不安だ。平田大尉と味沢兵曹長がこのまま宮古島に向かうか沖縄にするかを協議した。夜間でこの天候、宮古島を見逃せば東支那海を彷徨(さまよ)い、燃料切れで着水漂流か一気の自爆かだ。機上機関の佐藤軍曹に燃料の残を確認、巡航速度を保(たも)って沖縄を目指すと決まった。

雲を出たり入ったりを繰り返して時が過ぎた。帰途に就いて二時間三十分、味沢兵曹長の計算では沖縄の灯が見えていなければならない。雲の切れ間を見つけて降下してみたが黒く海が続くだけだ。

燃料が気になり佐藤軍曹に尋ねる。残量はあと十

五分、半ば自爆を覚悟する。戦果も無く訣別の電も打てずに果てるのは無念だ。徳永と外出した時、桟橋の父に私も手を振れば好かったと悔やむ。

「自分の航法は絶対に正しい。偶々雲の中を飛行中、沖縄の線を通り過ぎてしまったのだ」

味沢兵曹長が引き返す決断を平田大尉に求めた。即座に大尉は同意し、十五分しか飛べぬ燃料で反転した。

残量が十分を切った時、灯が一つ左前方に見えた。

「基地か！」

安堵するが遠い。五十粁か六十粁は先だ。着陸まで燃料が保(も)つかどうか微妙だ。機首を下げ、着陸姿

勢にて接近する。――。

間違いなく北飛行場だ。叩き上げの海軍さんの航法はさすがだ。

「あと五分！」

ほっとする暇も無く佐藤軍曹が怒鳴った。計器には誤差が有る、誘導コースを周回する余裕は無い。機は脚を下ろし、滑走路に向かって直進する。

私は佐藤軍曹と側方窓から懐中電灯で脚を調べた。片脚のタイヤがパンクして跛（びっこ）の状態であれば接地と同時に機は転覆する。転覆して火を出し、魚雷の炸薬に引火すれば死んでも償えぬ迷惑となる。左右どちらの脚のタイヤにも風圧による変形やバタバタ

は無く、拳銃でタイヤを撃ち抜かずに済んで嬉しい。
私達のエンジン音が聞こえたのだろう、夜設の灯火が飛行場に拡がり始めた。こちらからは回光灯を点け、機の符号『キ』を発火信号で連続送信する。地上の灯が瞬(まばた)き、『キ』を送り返してきた。
夜間の着陸では各機に割り当てられた符号を発火信号で地上に送る。『着陸宜しきや？』の意味だ。着陸して差し障りの無い場合には符号をそのまま送り返してくる。待たせる場合には『マテ』と信号してくる。決まり通りのやり取りが、自爆を覚悟した十五分前を思うと夢のようだ。
九三二機は滑走路に進入を始めた。地上の風向指

示灯を見れば追風着陸で危険だが警告灯が点り、燃料計の針は既に零の下だ。したくても進入のやり直しは出来ない。平田大尉がエンジンの回転を絞り、滑り込みに移った。

ウソだと思った。それも飛び切り質(たち)の悪い冗談だ。双発機が、たぶん海軍の一式陸攻が、翼灯を煌(きらめ)かせて私達の進入コースを上昇してきた。

波は静かだった。私は胡坐で左の翼の上にいた。尻が海水に浸り、左の足に靴を履いていない。拳銃は腰のケースに収まっていたが飛行帽が無く、頭のてっぺんが割れているように痛い。触ろうとすると

肩と胸が痛み、左手を動かせず首も回せない。左の頬から鎖骨にかけて生温(なまぬる)く濡れている気がした。撫でると左のこめかみに硝子の破片が刺さっていた。

飛行機は沈みかけていた。右手で頬をひっぱたいても事態を理解できない。機首の方からバチャ〳〵と水を打つ音が聞こえた。闇を透かすとバタ足で泳いで来る者がいた。負傷しているらしく、苦労して私の横に這い上がってきた。佐藤軍曹だった。私が声をかけるより先に、

「オイ、大丈夫か！」と彼は怒鳴った。

西山伍長も助かっていた。事態が漸(ようや)く飲み込めてきた。右に傾いた回避姿勢のまま九三二機は燃料

切れで着水してしまったのだ。機長の平田大尉の姿が見えない。操縦席は殆んど海に沈んでいる。その水中で誰か藻掻いてい、何やら声が聞こえた。佐藤軍曹が飛び込み、襟を摑んで風防から引き出すと味沢兵曹長だった。副操縦の江田飛行兵長も風防から水面に浮き上がってきた。海水を吐き戻し、咽せて喉を鳴らした。操縦席の安全バンドを外すのに手こずったそうだ。

平田大尉は正操縦席に座っていた。気を失っているのか佐藤軍曹が引っ張っても何の反応も示さなかった。安全バンドを外そうと軍曹は潜ったが暗夜だし負傷もしているので思うようにならない。息を吸

いに水を掻いた勢(はず)みに、操縦席の後ろに付けてある防弾鉄板が大尉の後頭部に食い込んでいるのに触った。

尾部砲手の山田兵長は機体後部にいた筈だが機体はすっかり沈んで後部には捜しに行きようがない。脱出して漂流している可能性も有る。声を揃えて名前を叫び、万に一つを願って耳を澄ましたが応える声は海に無かった。

翼も海に沈んだ。遠くかすかに陸が望める。生き残った五人は左の翼で靴を脱ぎ、身軽になって泳ぐ準備をした。海に沈んだ翼を端まで歩き、江田、佐藤、西山、味沢、最後が私の順で陸に向かった。

私は自由の利く右手だけで水を掻いた。カボックを着けているので浮きはするが片手では上手く進む事ができない。皆に遅れまいと焦るが首の回らない私は焦れば焦るほど海水を飲み込んで気持が悪くなる。そのうえ呼吸が苦しくなり手足を動かすどころでなくなった。泳ぐのを止め、仰向けになって少し漂う。先行した四名の私を呼ぶ声が聞こえたが、なんとも苦しく応えられない。頭を打っている所為(せい)だろう記憶が途中抜け、気が付くと腰の深さを五人一緒で岸に向かって歩いていた。底が珊瑚で足の裏が痛かった。

佐藤軍曹は左胸を強打していた。西山伍長は額を

割り、マフラーで止血しているが暗いなかでも顔面が血だらけだ。味沢兵曹長は胸と顔を打ち、特に口の中を傷つけ、歯が相当に無くなっていた。舌も切れているらしく、唸るだけで言葉を話す事ができない。副操縦の江田飛行兵長は右の目を、・・・、負傷していた。一番参っているようであった私が最も軽傷だった。記憶が鮮明になり、北飛行場近くの海に墜落したのだと思い出す。時計が二十三時五十五分で止まっていた。

浜に続く崖を助け合い、苦労して登った。崖の上は唐芋の畑だった。飛行機が海に落ちたらしいと知っていて、土地の人達が駆け付けてきた。歯の根が

合わぬほど身体は冷えているのに喉が渇く、水を求めると何人もの人が家から薬缶で持ってきてくれた。注ぎ口に口を付けて五合ほども飲み、刻み莨まで吸わさせて頂いて人心地の付いた私は警備隊に連れて行ってもらった。警備隊の士官に四名の救護を頼み、地下足袋を借りて履き、案内は遠慮して北飛行場に向かった。飛行場に着き、予備機で鹿屋から来ていた戦隊長に戦況報告と平田、山田、両名の戦死を報告した。その途中、整備班長柴野中尉と整備分隊長星川曹長がピストに駆けてきた。

気が付くと私は褌一丁にされ、トラックに乗せられて仮包帯所に運ばれていた。報告を終えて気が緩

み、倒れる私を整備の二人が抱きとめて運んでくれたのだ。作戦の首尾を二人に尋ねた。柴野中尉は頭を横に振るばかりで、台湾に向かった機もあるようだが『ワレラユキト（ワレ雷撃終了帰途ニ就ク）』を打ち、北飛行場に戻っているのは斉藤大尉機だけで、機体は三十数か所の被弾だと星川曹長が語った。坊やみたいなグンショウ（軍医少尉）に注射を打たれ、寝台に寝かされて朝を迎えた。

私達が着水したのは飛行場の北、読谷山の沖二千米である事が夜が明けて分かった。九三二機は片翼で珊瑚礁に乗り、魚雷を抱えて空を睨んでいる由。満潮で潮が満ちるのを私達は機が沈むと錯覚したの

だ。戦隊二十七機の出撃で生還者は斉藤機七名、平田機五名、結局十二名だけだった。山田兵長と平田大尉の遺体は予備機の隊員が収容した。

＊

鎌田静憲元陸軍曹長の回顧をもとに綴った。九十八戦隊誌『あの雲のかなたに』等との摺り合わせは敢えてしなかった。

「飛行機乗りはペアーが全員一緒に死ぬものと思っていた。家の者が一人で死んで骨も有るのは、若しかすると悪い事をしたからではないかと案じていたが、話を聞いてほっとしたと言ってたなあ」

平田大尉の御遺族とのやり取りと思われたが訊く

のを何となく先延ばしするうちに鎌田さんは他界し、知る術はもう無い。

主な参考文献

今日(こんにち)の話題第四十四集・昭和三十二年
あの雲のかなたに・昭和五十六年
役に立たない海軍用語(隠語)集・ネットなう